

## 研究発表要旨

かを明らかにし、青年に対する意味を明らかにしたい。このため、対人関係の基本的な在り方として Schutty, W. C. のいう三つの次元をもとにして、まず、対人的行動を明らかにする。さらに、こうした対人的行動と心理的離乳、対人的知覚等の関連が、今後、問題になると思われる。

- 119 青年期における交友関係の推移について—手紙、年賀状の交信を示標として— : 〇田中国夫 (関西学院大学) ・松山安雄 (大阪学芸大学)

青年期の通過の過程の中で交友関係がどのように推移してゆくかみようとするのがこの研究の目的である。この場合特に中学高校大学という経過の中でいかなる結合と分離が行われているかみようとするのである。つまり中学の交友が高校のそれまで、高校の交友が大学のそれまでどのように持続するか明らかにしたい。分析は手紙、年賀状の交信を指標にして行った。手紙は大学生と一般勤労青年から、年賀状は中学生高校生大学生から得た。交友関係を手紙の交信の範囲だけでみようとするのは局部的の非を免れないが、交信を一種のソシオメトリーとみなし、この角度から交友の推移の一端をみようとしたものである。

- 120 矢田部ギルフォード性格検査をとおしてみたパーソナリティの変容 : 大村政男 (日本大学)

この研究はパーソナリティ (人間像) の変容をインベントリーによって把握し、いかなる特性が体質的であり、どんな特性が環境にさらされて変容するかをうかがおうとするものである。

矢田部ギルフォード性格検査を用いて大学教養課程の新入生を検査した。第1回目の検査はかれらが不安に満ちている4月中旬に行なわれ、第2回目の検査は中間試験が終了し、落ち着きをとりもどした10月下旬から11月初旬にかけて実施された。ここにおいてはこまかいスコアの変動よりも、主として評価段階の面に注目した。かような研究が厳密な統制のもとに施行されれば、特性をいくつかの層に分類することもできるであろう。

## 6. カウンセリング

- 323 MMP I 標準化のための研究〔Ⅵ〕—Hs, D, Pt 尺度の検討— : 〇坪上宏・肥田野直・平田久雄 (東京大学) ・長塚和弥 (埼玉大学) ・堀久 (小石川高等学校)

MMP I の標準化にあたって、すでに Pd, Pa, Sc の3臨床尺度、および妥当性尺度の検討を行ってきたが、今回は Hs, D, Pt の各尺度について標準化の手続きを行なった。

規準群として、Hs 尺度には「心気症」D 尺度には「うつ病、うつ状態」Pt 尺度については「強迫神経症」と明確に診断された者各30例を用いた。

対照群の一般成人には、男女各300名を年齢、職業の点で偏らないように集めて用いたが、その分布を昭和30年度の国勢調査(都市)の結果と比較すると略一致する。両群についての各項目の応答率の差を比較して差の大きい項目を選び、上記の種類の新尺度を作製した。

- 324 MMP I の I R について : 岩脇三良 (防衛大学校)

Welsh が MMP I の臨床尺度からつくり出した Internalization Ratio (I R), 即ち、

$$I R = \frac{Hs + D + Pt}{Hy + Pd + Ma}$$

は他人にトラブルを与える傾向の強いものでは低い値を示すといわれている。ソシオメトリーで、選択されたものと拒否されたものの I R を比較し、I R の効力を検討し、更に、ローゼンツワイクの P-F テストの反応との関係を調べた。